

令和2年度病害虫発生予報第3号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病害虫名	予想発生量	作物名	病害虫名	予想発生量
水 稲	葉いもち	並	ブドウ	べと病	やや多
	ヒメトビウンカ	やや少		チャノコカクモンハマキ	並
	縞葉枯病	並	果樹の共通害虫	カメムシ類	多
	イネミズゾウムシ	やや少			
カンキツ	そうか病	やや多	露地キュウリ	べと病	並
	黒点病	並		炭疽病	並
	ヤノネカイガラムシ	並		褐斑病	並
	ミカンハダニ	やや少		うどんこ病	並
	アブラムシ類	並		斑点細菌病	並
	ミカンサビダニ	やや少		モザイク病	並
モ モ	せん孔細菌病	やや多	青ネギ	疫病	並
	果実腐敗性病害	やや多		さび病	やや多
	(灰星病、ホモプシス腐敗病等)	やや多		べと病	並
	褐さび病	並		軟腐病	並
	モモハモグリガ	やや少	ネギハモグリバエ	やや少	
	ナシヒメシンクイ	並	イチゴ(育苗床)	炭疽病	並
モモノゴマダラノメイガ	やや少	うどんこ病		やや多	
カ キ	炭疽病	やや多	露地キク	白さび病	やや多
	うどんこ病	やや多			
	落葉病	やや多	野菜、花きの共通害虫	アブラムシ類	並
	カキノヘタムシガ	やや少		アザミウマ類	多
	フジコナカイガラムシ	やや少		(特にネギアザミウマ)	

太文字の病害虫：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病害虫を示す。

*予報根拠中の記号

(+)：発生量を多くする要因

(-)：発生量を少なくする要因

(±)：発生量が平年並になる要因

令和2年度 病害虫発生予報 第3号 (6月)

A. 水稻の病害虫

1. 葉いもち

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬の早短期栽培での発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) B L A S T A M (いもち病発生予察システム)での感染好適条件を満たす日は5月27日に認められ、5月以降の出現頻度は平年並であった。(±)
(3) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

- 対 策 (1) いもち病対象の育苗箱施薬を行っていない圃場では、今後の気象条件に注意して、本田での薬剤防除を6月下旬から7月上旬に行う。
(2) 補植用の置き苗は発生源となるので、補植終了後に速やかに処分する。

2. ヒメトビウンカと縞葉枯病

予 想 発生量 : ヒメトビウンカ : やや少
縞葉枯病 : 並

- 根 拠 (1) 5月中旬の小麦上でのヒメトビウンカの発生量は平年より少なかった。
(-)
(2) 5月下旬の早短期水稻でのヒメトビウンカの発生は認めなかった。(-)
(3) 近年、ヒメトビウンカの保毒虫率及び縞葉枯病の発生が増加傾向にある。
(+)

- 対 策 (1) ウンカ類対象の育苗箱施薬を必ず行う。
(2) 育苗箱施薬を行っていない圃場や縞葉枯病の多い地域では、本田初期にヒメトビウンカ対象に薬剤防除を行う。なお、早期栽培での防除適期は6月上中旬、短期栽培と普通期栽培での防除適期は7月上中旬である。
(3) 本田初期の発病株は二次伝染を引き起こすため、抜き取って処分する。

3. イネミズゾウムシ

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 5月下旬の早短期栽培において、食痕の認められる株の発生量は少なく
(-)、生息成虫数はやや少なかった (-)。

- 対 策 (1) 株当たり寄生成虫密度が0.3~0.5頭(育苗箱施薬を行っている場合は0.5頭以上)に達している圃場は、水面施用剤で追加防除を行う。
(2) 根が健全に育つようにできるだけ浅水管理し、成虫の葉の食害が多い圃場では早めに中干しを行うことで幼虫の被害が軽減できる。

B. 果樹の病害虫

—カンキツ—

1. そうか病

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

- 対 策 (1) 幼果期に防除する。
(2) 樹勢を健全に保ち、防風対策を行う。

2. 黒点病

- 予 想 発生量 : 並
根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
対 策 (1) 伝染源である枯枝を除去し、6月中旬～7月中旬に薬剤防除を徹底する。
(2) 梅雨期には固着性の高い展着剤を加用する。

3. ヤノネカイガラムシ (第1世代)

- 予 想 発生量 : 並
根 拠 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
対 策 (1) 1～2齢幼虫期に防除する。
(2) 発生圃場では、かけむらのないように薬剤防除を実施する。

4. ミカンハダニ

- 予 想 発生量 : やや少
根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 6月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－)予報である。
対 策 (1) 100葉調査で、1葉当たりの寄生雌成虫数が0.5～1頭になれば防除する。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. アブラムシ類

- 予 想 発生量 : 並
根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 6月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－)予報である。
対 策 発生を認めたら早めに薬剤防除を実施する。

6. ミカンサビダニ

- 予 想 発生量 : やや少
根 拠 (1) 県予察圃場での前年秋期の発生は認めなかった。(－)
(2) 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)
(3) 6月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並か多い(－)予報である。
対 策 前年発生の多かった圃場では6月中～下旬に薬剤防除を実施する。

ーモ モー

1. せん孔細菌病

- 予 想 発生量 : **やや多**
根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 一般圃場での5月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(3) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
対 策 (1) 薬剤防除を実施していない園では早急に防除する。
(2) ストレプトマイシン剤(アタッキン水和剤含む)を使用する場合は、収穫前日数に注意する。
(3) 例年多発する圃場では果実への感染を防止するため、早めに袋かけを行う。
(4) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去し、処分する。
(5) 病原菌は葉や果実の自然の開口部(気孔、水孔等)や傷口から侵入するので、風当たりの強い園地では防風ネット等の防風対策を施すとともに、コス

カシバ、キクイムシ、モモハモグリガ等の害虫防除を徹底し樹勢低下を防止する。

2. 果実腐敗性病害（灰星病、ホモプシス腐敗病等）

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 発病枝及び発病果を除去する。
(2) 収穫20日前から5～7日間隔で、果実に十分付着するように薬剤防除を実施する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐さび病

- 予 想 発生量 : **並**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(3) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 枝の病斑が最大の伝染源であるので、見つけ次第発病葉とともに切り取り適正に処分する。

4. モモハモグリガ

- 予 想 発生量 : **やや少**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での5月の発生は認めなかった。(－)
(2) 一般圃場での5月下旬の発生は認めなかった。(－)
(3) 県予察圃場フェロモントラップでの5月下旬の第1世代成虫の誘殺は認めなかった。(－)
- 対 策 成虫発生最盛期からふ化直後に薬剤防除を実施する。

5. ナシヒメシンクイ

- 予 想 発生量 : **並**
- 根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の芯折れ率は平年並であった。(±)
(2) 一般圃場での5月下旬の発生は認めなかった。(－)
(3) 県予察圃場フェロモントラップでの5月の誘殺数は平年並であった。(±)
- 対 策 (1) 早めに袋かけを行い、無袋栽培では10日間隔で薬剤防除を実施する。
(2) 芯折れは枝の中から幼虫が脱出しないうちに剪除する。
(3) 樹上及び地面に落果した被害果は処分する。

6. モモノゴマダラノメイガ

- 予 想 発生量 : **やや少**
- 根 拠 県予察圃場予察灯の5月の誘殺数はやや少なかった。(－)
- 対 策 (1) 早めに袋かけを行い、無袋栽培では10日間隔で薬剤防除を実施する。
(2) 樹上及び地面に落果した被害果は処分する。

ーカ キー

1. 炭疽病

- 予 想 発生量 : **やや多**
- 根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 6月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(+)予報である。

対 策 (1) 発病枝は見つけ次第除去し、処分する。

(2) 6月中～下旬に薬剤防除を実施する。薬剤防除はかけむらのないように散布する。

2. うどんこ病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場での5月下旬の発生量は多かった。(+)

(2) 一般圃場での5月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(3) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

対 策 薬剤防除は、発病初期に、葉裏に付着するように散布する。

3. 落葉病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 前年秋期の落葉病の発生量は平年並であった。(±)

(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

対 策 (1) 樹勢を健全に維持する。

(2) 6月～7月上旬に2～3回防除する。薬剤防除は葉裏にも十分付着するように散布する。

4. カキノヘタムシガ

予 想 発生時期 : **やや遅い**

発生量 : **やや少**

根 拠 (1) 県予察圃場での越冬世代成虫の発生量はやや少なく(－)、発生時期は判然としなかったが、現地における発生時期のピークは5月24～25日頃と推測されやや遅かった。

(2) 県予察圃場での5月下旬の被害発生は平年と同様に認めなかった。(±)

対 策 (1) 越冬世代成虫最盛期(5月下旬)の7～10日後の薬剤防除を実施するが、できていない場合は、必ず6月中旬までに実施する。

(2) 防除を実施したにも関わらず、被害が続く場合には追加防除を行う。

5. フジコナカイガラムシ

予 想 発生量 : **やや少**

根 拠 一般圃場での5月下旬の発生は認めなかった。(－)

対 策 幼虫最盛期(6月第3半旬頃)に薬剤が幼果のがく部に十分付着するように散布する。

ーブドゥー

1. ベと病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での5月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

対 策 (1) 圃場の排水に努め、敷わらを励行する。

(2) 被害葉は見つけ次第除去し処分する。

(3) 薬剤防除は葉裏に十分付着するように散布する。

2. チャノコカクモンハマキ

予 想 発生量 : **並**

- 根 拠 県予察圃場フェロモントラップでの越冬世代成虫の誘殺数は平年並であった。(±)
- 対 策 幼虫発生期（6月中旬頃）に防除する。

－果樹の共通害虫－

1. カメムシ類

- 予 想 発生地域： 県下全域、特に山林隣接圃場
発生量： 多（令和2年5月22日付け注意報第2号発表）
- 根 拠 (1) 坂出市府中町の予察灯の誘殺数は多かった。(＋)
(2) 綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は過去9ヶ年の平均値に比べ多かった。(＋)
- 対 策 (1) ナシ、モモ、カキ、キウイフルーツ、ブドウ等は、幼果期から被害を受ける場合があるので、有袋栽培では、できるだけ早く袋かけを行う。
(2) 施設栽培の場合は、開放口をネット（4mm目合い）で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
(3) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
(4) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
(5) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
(6) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
(7) 防除薬剤は、地域の病虫害防除暦等を参考にする。
(8) 作物によって、登録のある薬剤が異なるので、使用にあたってはラベルをよく読んで、登録の有無や収穫前日数、使用回数等使用基準を遵守する。

C. 野菜、花きの病虫害

－露地キュウリー

1. ベと病

- 予 想 発生量： 並
- 根 拠 (1) 5月下旬のトンネル栽培での発生量はやや少なかった。(－)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、肥料切れに注意し、樹勢が衰えないように栽培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

- 予 想 発生量： 並
- 根 拠 (1) 5月下旬のトンネル栽培では発生を認めなかった。(－)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は適正に処分する。

- (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐斑病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬のトンネル栽培での発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は適正に処分する。
(3) 薬剤散布は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすように努める。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. うどんこ病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬のトンネル栽培での発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で実施する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. 斑点細菌病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬のトンネル栽培での発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに過繁茂にならないよう栽培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。

6. モザイク病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬のトンネル栽培での発生量は平年並であった。(±)
(2) 5月下旬のトンネル栽培ではアブラムシ類の発生量は平年並であった。(±)

- 対 策 (1) 収穫用具の消毒をする。
(2) 発病株は、早期に抜き取り適正に処分する。
(3) アブラムシ類の防除を行う。

－青ネギー

1. 疫病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(2) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているため、圃場をかえるか土壌

消毒を実施する。

- (3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。

2. さび病

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(+)

- 対 策 (1) 窒素質肥料は適切に施用し、草勢を良好に保つ。
(2) 取り残しの発病株が周辺への伝染源になるので、早めに除去し適正に処分する。
(3) 薬剤散布は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。発生を認めたら治療効果のある薬剤で防除を行う。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ベと病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 6月の気象は気温が高く(−)、降水量が平年並か多い(+)予報である。

- 対 策 (1) 圃場を見回り、発生を確認した場合は直ちに薬剤散布する。
(2) 取り残しの発病株が周辺への伝染源になるので、早めに除去し適正に処分する。
(3) 窒素質肥料は適切に施用し、草勢を良好に保つ。
(4) 排水不良は発病を助長するので、圃場の排水を良くする。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. 軟腐病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生は認めなかった。(−)
(2) 6月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(+)予報である。

- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
(2) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
(3) 発生の多い圃場では、菌密度が高くなっているので、圃場をかえるか土壌消毒を実施する。
(4) 薬剤防除は予防的に7~10日間隔で行う。

5. ネギハモグリバエ

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はやや少なかった。(−)
(2) 6月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(−)予報である。

- 対 策 (1) 防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど、適切に処分する。
(3) 多発してからの防除は困難であるので、産卵痕や食害痕が見え始めたら早めに防除する。
(4) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

—イチゴ（育苗床）—

1. 炭疽病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬の育苗床での発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 6月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 発病葉やランナーは可能な限り除去するとともに、除去した発病葉、ランナーは伝染源となるので適正に処分する。
(2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返り等がないように注意する。
(3) 親株床での防除を徹底し、育苗床での防除回数を減らすよう努める。
(4) 薬剤防除は予防的に行い、初期感染を防ぐ。
(5) Q o I 剤に対して感受性の低い菌株が確認されているので注意する。

2. うどんこ病

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 5月下旬の育苗床での発生量はやや多かった。(＋)

- 対 策 (1) 本病は葉裏に発生することが多いので、こまめに観察して早期発見し、薬剤は葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
(2) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。曇雨天が続く病気の急増が予想される場合には、防除間隔を短縮する。
(3) 伝染源を絶つため、収穫を終了した圃場（本圃）の株は直ちに処分するとともに、子苗（ランナー）を切り離れた後、親株は早期に除去し処分する。
(4) 窒素肥料の過多や葉が混み合ったりすると多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。
(5) 7～8月の高温期になると白い粉状の分生胞子は見られなくなるが、病原菌はイチゴ苗に残存しているため、本圃へ発病株を持ち込まないように発病葉は可能な限り除去するとともに、育苗床での防除を徹底する。
(6) 耐性菌の発生を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

3. ハダニ類

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 5月下旬の育苗床での発生量は平年並であった。(±)
(2) 6月の気象は気温が高い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 親株床での防除を徹底し、育苗床での防除回数を減らすよう努める。
(3) 育苗床（苗の親株からの切除後）では発生をこまめに観察し、早めに防除を実施する。散布にあたっては、使用回数に留意する。

—露地キク—

1. 白さび病

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 6月の気象は降水量が平年並か多い予報である。(＋)

- 対 策 (1) 薬剤散布は発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3) 採穂前の防除を徹底し、本圃に病気を持ち込まないようにする。
(4) 窒素質肥料の過不足がないように肥培管理をする。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はトンネル栽培キュウリ及びイチゴ(苗床)で平年並であった。(±)
- (2) 黄色水盤での5月のアブラムシ類の誘殺数は、過去9か年の平均並であった。(±)
- (3) 6月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-) 予報である。

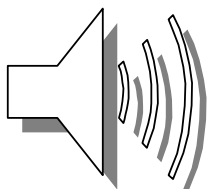
- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、アブラムシ類の飛び込みを防止する。
- (2) 本圃ではシルバーポリマルチ、シルバーストライプマルチ、シルバーテープをする。
- (3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。
- (5) 今後も有翅虫の飛来が続く場合もあるので、黄色水盤トラップによる誘殺数等(病虫害防除所ホームページに掲載 <http://www.jpnpn.ne.jp/kagawa/>)を参考にして、適期防除に努める。

2. アザミウマ類(特にネギアザミウマ)

予 想 発生量 : 多(令和2年4月14日付け注意報第1号発表)

- 根 拠 (1) 5月下旬の発生量はトンネル栽培キュウリでは多く(+)、青ネギではやや少なかった(-)。
- (2) 県予察圃場での5月のタマネギでの発生量は過去9か年の平均に比べ多かった。(+)。
- (3) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(+)。
- (4) 6月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並か多い(-) 予報である。

- 対 策 (1) 施設栽培では、防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 青ネギやアスパラガスなど被害が出やすい作物では、圃場を良く観察して、ネギでは葉にわずかなカスリ状の食害痕が見られる場合に、アスパラガスでは、圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。



6月～8月は、農薬危害防止運動月間です。

農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に使用できているか、チェックしましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>